



二〇二一年四月の教区会・教区門徒会の両臨時会において、教区教化委員会規則が改正され、教区教化委員会・教化推進本部の体制が刷新されたことに伴い、共同教化部会(仮)が新設されました。

そこから一年間、この部会の願いを模索する中で、組長・組門徒会長研修会をその模索の具体的な実践の場として位置づけ、途中、コロナによる延期を経ながらも、ようやく開催にこぎつけました。

にもかかわらず、新教区準備委員会財政専門部会の会議がこの日に設定され、研修会への欠席をお願いしなければならぬ状態が作り出されたことは残念という他はなく、当局にも猛省を促しているところです。

当部会としては、欠席された方に、当部会の趣旨と当日の講義・座談の内容をお伝えするべく、報告書を作り送付させていただきましたことにしました。

ご一読いただき、当部会の今後の活動にもご期待いただきたく、何卒よろしく願っています。

できれば、講義・座談の概要を文章化してお伝えしたかったのですが、その事がかえって、講師の意図や座談の雰囲気というものを疎外してしまうのではないかと判断に至りました。

そこで、まずは部会紹介を兼ねて研修会の趣旨を説明させていただき、当部会員の所感として、聞き取り受け取ったものをお伝えすることに致します。

また、この研修会については、教区だより二〇二三年四月号にも掲載される予定です。この報告書共々、教区HP(<https://www.k-kyoku.net/>)でもご覧いただけますので、どうぞ活用ください。併せてよろしく願っています。

### 趣旨説明・部会紹介

**皆**さんこんにちは。本日は遠近各地より、ようこそご参

会いただきました。先ほど本部長より二〇二一年度に行われた教区教化体制の見直しの経緯と、共同教化部会(仮)発足の経緯についてお話がありましたように、この共同教化部会(仮)は名前の通り、共同教化をテーマとして新たに発足した部会であり、私からはこのたびの研

修会の趣旨についてお話をさせていただきます。

### 私

も普段は近江第六組、滋賀県日野町にある託仁寺の住職をしております。うちの組は三十三ヶ寺ありますが、組長や副組長は任職在任中、基本的に一回きりです。だから私は今回副組長が当たったらもう当たることはなくて、次に回ってくるのは組長で二〇三〇年後です。

こういうこともそれぞれの組によって、役職者の選び方から会計の仕方まで全て違います。ましてや京都教区には二十九もの組がある広大な教区です。生活環境も違えば、寺の状況も千差万別です。それぞれの二十九通りのやり方があるということ。これは「教化」にも同じことが言えると思います。つまり、同じ教化事業と言っても、その位置づけや意味合い、運営の仕方それぞれによって違うという事です。これはちょうどお雑煮みたいなもので、京都の雑煮は白みそだそうですが、滋賀の私の地域はかつお昆布のすまし汁なんです。西日本は丸餅で東日本は角餅だとか、焼いてか入るのか焼かずに入れるかとか

か、地域によって全部違う。鳥取や島根は雑煮に小豆を入れるそうです。僕らからすると、それは雑煮じゃなくてぜんざいだろって思いますが、それが雑煮なんです。それも雑煮です。だからこれが雑煮だって一つのものはじつは無い。つまり片方が思い浮かべている雑煮と、もう一方が思っている雑煮は同じではないということ。だから教化ということも、これが教化ですって一律に、おしなべて語れるようなものはない。ですから、さあ教化について話しをしましょうって時に、例えば共同教化、同朋会運動、推進員という知っている言葉でさえも、実は共通した一つの認識がある訳では無いということなんです。つまり分かっているつもりが、実は共通した認識を持ち合わせてなかった、よくよく話し合ってみると分らない事を、分かったつもりにしてきたんだと思うのです。それは、分かったことにならないと物事が進んでいかないので。

### 教

化とは何かとか、同朋会運動がどうかとか、そんな事を初めから話し合うよりも、も

うそれは分かったことにして、暗黙の大前提としてやっていく方が楽なんです。そこをやりだすと、時間かかるし面倒だし何も決まらないし、そもそも考えてみたこともなかったり。私も教化委員ですが、四六時中教化の事を考えているわけではありません。うちは寺だけでは食べられませんので、今でもいくつかアルバイトを掛け持ちしながら生活しています。兼職寺院がほとんどの京都教区にあって、目の前の仕事に追われてそれどころでなかったり、今後教区改編や行財政改革が差し迫る中、少し考えてみたとしても今ある組織やシステムがあまりに大きすぎて複雑で、考えることを諦めるほうが楽だからです。それよりも、色々と思う事や言い事はあるにせよ、甘んじて、呑み込んでやっつけていくしかない。でも何かうまくいってないんじゃないかという思いがあったとしても、じゃあどこがどううまくいってないのかというと、それもよく分からない。だからもう分かったことにして、物事を進めていくことを優先してきた。立ち止まるのが許されない状況です。

## 共

同教化部会（仮）は、発足当初から二年間かけてその部分を議論してきました。コロナの事もありましたが、何か急いで事業を実施する前に一度、教化とは何かじっくりと話し合おう。共同教化、教区教化がうまくいくとはどういうことか？それを他人事にせず、自分にとって教化とはどういうものなのか、よくよく考えてみよう、月に一度の限られた時間ではありましたが、真面目に考えて、話し合ってきたつもりです。その内容は教区HPに「共同教化部会（仮）総括」という形でご覧いただけますし、今日の資料の中にもその一部を紹介させていただきました。私たちは今日のこの研修会を、共同教化部会（仮）の自己紹介と位置づけてきました。それは、この新しく発足した部会が何をやる部会で、教区の皆さんと何をやっていきたいのかを表明する機会としたい、そう考えてきました。私たちが皆さんと一緒にいきたいこと、それは「一緒に考える」という事です。考えることを諦めず、考えることを誰かに任せず、一緒に考えていきたい。

「教区教化は教区人の手で」という言葉がありますが、これは責任を擦り付けられている言葉ではなく、私たち一人ひとりが教区教化というものに主体性を持って、他人事にせず、自分事として考えていく言葉だと、私は受け取っています。ですからこの共同教化部会という部会名は（仮称）のままにしています。これは「共同教化」という言葉が指し示す内容が何なのか、そのことをどう事業化していけるのかを我々だけではなく、我々が二年間議論してきたことをしっかりと伝えした上で、教区の皆さんとこれから考えていきたい。そういうことで（仮称）のままにしています。

## も

う一つ、この部会には「出向く教化」というキーワードがあります。これは教区が組をサポートしていくという方向性を示すものであります。地区や組というものは一つの行政機構としての側面はありますが、こと「教化」においては地区や組は教区のためにあるのではなく、寺は組のためにあるのではなく、寺は組のためにあるのではありません。一か寺一か寺のためにこそ、組や教区はあるべき

です。つまり、組織のために寺があるのではなく、それぞれの寺が教化の現場になるために組織がある。それを仮に共同教化と呼ぶのだとしたら、この「出向く教化」という現場へのベクトルを持って、教区としてはそれぞれの現場をサポートしていきたい。しかし、その出向いていくという時に、教区はどのようなサポートができるのか。それぞれが違う環境なんですから、一律のサポートということではないはずです。あずきのお雑煮を食べる所に、白みそを押しつけてもしょうがないわけです。私は子どもの頃、どこの家もちと同じ雑煮を食べていると思っていました。ところがそんなことはなく、雑煮はそれぞれ違うことを知りました。だからまずは、それぞれのお雑煮がどんなものか、こんな雑煮もあるという情報交換と、自分たちがこれまで作ってきた雑煮はどんなものかの自己点検。伝統的なものを作り続けるのも大切なことではあります。ちょっと大変になってきたなら、じゃあ今の状況に合ったものを考えてみようか、例えば若者や子ども向けの雑煮

を作ってみようか、大勢の雑煮を作るのが大変だったら、少数で食べる雑煮を考えてみようか、餅をつくのが大変なら買ってきてもいいし、そのかわりみんなで食べることを大事にしようとか。そういう時に材料や手がどうしてもこれが足りない、あれが欲しいとなった時に、じゃあ教区にこんなサポートをしてほしいねとか、教区教化の仕組みをこんな風にしたらどうだろうとか。そういう風に教区と組がうまく関わって、人や場所やお金があまく循環していくうになればいいと思っています。それが資料の中にある「教化の循環」のイメージです。

**今** 日の研修会はその第一歩、みんなで教化を考えていくための足掛かりとして開催します。これまでは正副門徒会長研修会として開催していましたが、今回からは僧侶と門徒が一緒になって教化を考える機会となることを狙いとして、組長・門徒会長研修会とさせていたいただきました。講師には以前に京都教区の駐在教導として、またその後も全国の教化の現場を見つけてこられた響田和人師をお招きし、

「共同教化とは何か？」というテーマでお話をいただき、その後我々スタッフを交えて班別に分かれて座談会をしたいと思っています。

**最** 後にもう一つ、今日は昨年部会で作成したチラシをお配りしています。モチーフとして阿弥陀経に出てくる、極楽浄土に住む鳥、共命鳥を採用しています。これは掴みどころのない共同教化というものを、一身双頭という共命鳥がそれを表現しているように感じたからです。この二つの頭というのは住職と門徒、住職と坊守、男性と女性など、様々な見方ができると思います。頭が二つあるという事は、それぞれの考えが違うということ。その違うものが集まって生きるところには、必ず衝突が起こります。軋轢が生まれます。うまくいかなくて当然です。うまくいかないからこそ、私たちには教化が必要なんでしょう。そしてそれは教えるを聞いてうまくやろうという話ではなく、二つの頭を一つにしようという事でもなく、うまくいかないものがうまくいかなければ、教化を通してそれ

その現場で立ち上がったいく力を賜っていくことだと思いません。これは一人ではできません。私もそうですが、一人では何もできないし、すぐに怠けてしまう。ですから私にとっでは異なる他者がいるからこそ、聞いて、考えて、動くことができるのです。だから教えというもの、私を立ち上がらせるものだと思います。つまり教化とは一人で完結できるものではなく、教化というものは、それ自体がそもそも共同性を持っているということ。です。

**我** 々の共同教化部会（仮）では二年間、教化について様々な話し合いをしてきました。たった八人の話し合いでも、それぞれが教化に対する違う考えを持っていることが分かりました。しかしそのことを決してネガティブに捉えているのではなく、その対話こそが共同教化の第一歩であり、そこからしか共同教化が具現化することはない。そうした話し合いの場を、これから少しずつ広げていきたい。その第一歩が今日の研修会であり、五月に計画している丹波一組訪問であります。この訪問の目的

は、決して教化事業の評価や査定に行くわけではありません。雑煮の響えで言えば、白みそ雑煮のレシピを全国に普及させることが目的ではありません。広く教区の方々と顔を合わせ、意見交換を通して、共に教化を考えていく関係性を構築していきたいというものです。今日の研修会も同じであります。これは大変に面倒なことであります。時間のかかることであります。ああでもない、こうでもないというウロウロし、目の前の課題にアタフタしながらも、教化を通してそれぞれの現場に立ち上がっていく人が一人でも生まれることを願いとして、我々共同教化部会を取り組んでいきたいと思

（主査 藤川秀行）



共命鳥…因伯組光徳寺 小早川 凡観

